

マダガスカル北西部アンカラファンツィカ国立公園における 外来食肉目の生態系への影響

平成 28 年入学
派遣先国：マダガスカル共和国
綾仁 荘子

キーワード：外来種、食肉目、行動パターン、食性

対象とする問題の概要

マダガスカルの生態系は、豊かな生物多様性と高い固有率に象徴される。近年、マダガスカルにおいて、イヌ (*Canis familiaris*)、ネコ (*Felis catus*)、コジャコウネコ (*Viverricula indica*) という外来食肉目が、在来生物の捕食等により生態系へ影響を及ぼすことが懸念されている [Farris et al. 2015]。しかし、現時点で、マダガスカルにおける外来食肉目の食性や行動域などの生態情報は、生態系への影響を評価するには不十分である。

マダガスカル北西部に位置するアンカラファンツィカ国立公園には、上記の外来食肉目 3 種が生息し、在来食肉目はフォッサ (*Cryptoprocta ferox*) とコバマンゲース (*Eupleres goudotii major*) の 2 種が生息している。同国立公園は、UNESCO の MAB (Man and Biosphere) 計画に基づき、保全だけでなく自然と人間社会の共生に重点が置かれている保護区であり、公園内には多数の村落が存在している [Aymoz et al. 2013]。

研究目的

目的①：自動撮影カメラを用いて、アンカラファンツィカ国立公園の森林における外来食肉目と在来食肉目の生息数および行動パターン、捕食される可能性のある在来生物の生息状況を明らかにする。

目的②：公園内村落の一つであるアンピジュルア村に生息するイヌに GPS 首輪をとりつけて行動域を記録する (写真 1)。

目的③：生態学的調査として糞分析、人類学的調査として地域住民へのインタビューという二つのアプローチから食肉目の食性の解明を試みる。

フィールドワークから得られた知見について

表 1 のように、自動撮影カメラでは、外来食肉目 3 種、在来食肉目 2 種が撮影された。なかでもネコの撮影回数が顕著に多く、撮影場所に関しても、カメラの設置場所 22 か所のうち 21 か所で撮影された (写真 2)。ネコに捕食されて

表 1. 自動撮影カメラで撮影された生物種と撮影回数

種名	撮影回数
哺乳類	
ネコ <i>Felis catus</i>	60
イヌ <i>Canis familiaris</i>	3
フォッサ <i>Cryptoprocta ferox</i>	2
コバマンゲース <i>Eupleres goudotii major</i>	2
チャイロキツネザル <i>Lemur fulvus</i>	18
ウシ <i>Bos primigenius indicus</i>	9
イノシシ <i>Potamochoerus larvatus</i>	3
齧歯目	38
テンレック目	23
鳥類	269

いる可能性がある地上性の鳥や、ネズミ、テンレックなどの撮影回数も多かった。

アンピジュルア村のイヌ 4 頭（オス 3 頭、メス 1 頭）に GPS 首輪をつけて、夜間約 12 時間の行動域を記録したところ、イヌは村の周辺を遊動していることがわかった。この結果は、地域住民から頻繁に得られる「イヌは村の警備をする役割を担っている」という意見を支持するものであった。

食肉目の食性に関する調査については、計 17 個の糞（フォッサの糞 13 個、イヌの糞 1 個、コジャコウネコの糞 1 個、その他の糞 2 個）を集め、洗浄して内容物は保存したが、糞内容物の種同定はまだ行っていない。聞き取り調査では、地域住民 18 人（男性 16 人、女性 2 人）に対して、森に棲むフォッサ、コジャコウネコ、ネコ、コバマングースと村に棲むイヌ、ネコの食べ物を尋ねた。その結果、フォッサと森に棲むネコの食べ物は、ニワトリやネズミなどの肉類を中心とした同様の構成であった。コジャコウネコの食べ物はムクナージ (*Mokonazy*) という果実、コバマングースはミミズや昆虫、という回答がもっとも多かった。村のイヌは米のおこげ、ネコは米や魚という回答が多かった。

以上の結果から、アンカラファンツィカ国立公園における外来食肉目 3 種のうち、生態系におよぼす負の影響がもっとも大きいのは、ネコだと考えられる。なぜならば、自動撮影カメラによる撮影回数の多さから、在来食肉目との生息域や餌資源をめぐる競合、在来生物の捕食が予想され、さらに、地域住民への聞き取り調査の結果から、とくに森に棲むネコとフォッサの餌資源における競合が生じていると推察されるからである。

反省と今後の展開

自動撮影カメラの結果が示唆するように村のイヌが森へ行かないということを示すには、さまざまなタイプのイヌに GPS 首輪をつける必要があるが、今回は人に慣れている個体を選んでしまったので、結果に偏りがあるかもしれない。今後首輪のつけ方を工夫する必要があるだろう。糞分析は、ほとんどがフォッサの糞だったので、次回以降はネコの糞をみつけられるようにしたい。また、首都にあるアンタナナリヴ大学で動植物標本を使わせてもらって糞内容物の同定作業ができるようにスケジュールを立てていきたい。

参考文献

- Aymoz, B. G. P., Randrianjafy, V. R., Randrianjafy, Z. J. N., and Khasa, D. P. 2013. Community Management of Natural Resources: A Case Study from Ankarafantsika National Park, Madagascar, *Ambio* 42(6): 767–775.
- Farris, Z. J., Gerber, B. D., Karpanty, S., Murphy, A., Andrianjakarivelo, V., Ratelolahy, F., and Kelly, M. J. 2015. When carnivores roam: temporal patterns and overlap among Madagascar's native and exotic carnivores, *J Zool* 296: 45–57.



写真 1. GPS 首輪をつけたイヌ



写真 2. 自動撮影カメラで撮影されたネコ